

「東京女子医科大学雑誌」の半世紀（１）（２）

東京女子医科大学 名 誉 教 授 石 井 妙 子
前図書館長

図書館月報（東京女子医科大学図書館）

No. 227, 228 別刷

❁ 資料紹介 ❁

「東京女子医科大学雑誌」の半世紀 (1)

名誉教授 石井 妙子
前図書館長

本学の機関学術誌「東京女子医科大学雑誌」が創刊された昭和6年から、55年の歳月を閲した。昭和61年の年頭にあたり、本誌の半世紀を越える歴史を、本月報227、228号において回顧し、次の時代への跳躍の踏石としたい。

I 「東京女医学会」と「東京女医学会雑誌」 (1930～1943)

1 東京女医学会の誕生

東京女子医科大学の前身、東京女子医学専門学校内で催されていた学術集談会を発展的に解消させて、新たに「東京女医学会」が結成されたのは



会長 吉岡彌生

1930(昭和5)年末のことであった。本会の創設には、会長吉岡弥生校長をたずけて、病理学教授佐藤 清の力が大きく、発会と同時に編集主幹に任せられた。



編集主幹 佐藤 清

時あたかも、過去1年8カ月の工事日数を費して竣工した本校附属病院(現在の1号館)が、河田町10番地に、当時わが国唯一の十字形放射状様式の鉄筋コンクリート造り、地上6階、地下2階の偉容を出現した。この附属病院落成の好機を得て、東京女医学会発会式と第1回例会が催された。竣工当時の附属病院には臨床講堂は未着工であったので、発会式ならびに第1回例会は、河田町6番地の木造校舎の3階大講堂で、1930(昭和5)年11月24日午後5時半より举行された。第1回例会では、会長挨拶、幹事の経過報告、研究発表5題につづいて、主幹 佐藤 清教授自ら「血液型に就て」の講演を行なった。

本学会は、医学医術の進歩を図る目的を達するため、至誠会会員ならびに本会の目的に賛同する医師および篤志者を会員とし、会長、副会長それぞれ1名、評議員若干名と幹事2名以上をおき、事業として集会と雑誌発行をなすことを、会則に宣した。

集会としては例会、総会、評議員会を開くこと、機関誌として「東京女医学会雑誌」を年3回以上発行することとなった。

2 東京女医学会雑誌の創刊

東京女医学会雑誌は翌1931(昭和6)年3月に創刊された。B5判、タテ書き、アート紙の付図・写真が付けられ、総説、原著論文、臨床実験報告、講義、検査報告、欧文雑誌抄録等を掲載した。

会長 吉岡弥生は、本誌の創刊にあたって、「現今医事雑誌の刊行せられるものは、その種類むしろ多きに過ぎる嫌いさえあるに拘わらず、吾人の期待に副うもの、自己の研究業績を発表するに適当な機関誌乏しきを嘆き、これを医するに、漸く

機熟し、わが1,500有余名の校友と一般有志とを会員とする本会が、以上の欠陥を排するため、更に斯道実家のために、総説、原著、抄録、集談、会報告、臨床講義に、診断治療に関する新知見を網羅して斯界にま見えんと志し、万難を排して本誌の刊行を企て、実現し得たことを慶賀し、その使命の重かつ大なることを痛感し、雑誌刊行の業の一見容易のように見えて、その実頗る至難なるに耐えて、労を惜しまず所期の目的を達するよう。」と、会員を激励している。

創刊された東京女医学会雑誌第1巻第1号には、



第1巻第1号表紙

上記会長の「東京女医学会雑誌発刊之辞」を巻頭に、つづいて総説、加藤 泰(皮膚科学)教授の「梅毒の治療法に就て」、原著には越智シゲル、安川八重、佐藤 清・矢ヶ部栄子、佐藤 清等の4篇、臨床実験として鬼頭阿佐夫、平間光子・矢ヶ部栄子、田宮貞仁・中西藤子・福永利江外13名、木戸知恵外5名の4篇、講義として佐藤 清(病理学)教授の「原発性肝臓癌」等が掲載された。

1933(昭和8)年1月、本誌発行に功績のあった佐藤 清(病理学)教授は、編集主幹を辞任し、同氏は吉岡博人(衛生学)講師を後任として推薦され、満場異議なく可決された。



編集主幹 吉岡博人

3. 東京女医学会第1回総会

1934(昭和9)年3月末、前年4月起工の臨床講堂が完成した。落成を記念する講堂開きとして、東京女医学会第1回総会が4月6日盛大に举行された。吉岡弥生会長は開会にあたって、明治41年1月にただ一人の卒業生を出した本校が、その後25年間に2,000名の卒業生を出し、学術大会を催して研究発表する今日に到った感激を述べ、将来本校が大学に昇格することを併せて声明し、本校の内容実力共にその期に達していることを喜び、研究すれば立派に出来るという信念を持たれたいと、会員を励ましている。

吉岡博人主幹は本会創立以来の経過報告をし、つづいて研究発表は各科から33題、特別講演として病理学教授 佐藤 清の「白血球の系統的分類と臨床的意義に就いて」および内科学教授 今村 明の「腸チフス及類似熱性疾病」があり、会は午前8時開会、副校長 吉岡正明の閉会の辞を以て午後5時半に終わった。この第1回総会は、かつて例の

ない女子のみによる学術大会として終始盛会、充実した内容を以て将来の発展が予想された。当日、引きつづき午後6時より上野精養軒において懇親会が催されたことが記録にある。臨床講堂の落成式は翌々8日舉行された。

本学会総会はその後、敗戦の1945(昭和20)年を除いて、連綿と毎年開催され、1984(昭和59)年第50回を数えている。

4. 発会以後1943(昭和18)年まで

東京女医学会第2回例会が第1回例会の翌1931(昭和6)年5月9日に開かれて以来、例会は年毎に5～7回開催された。多くは金曜日、時に土曜日の午後6時半に開会されている。会場は病院内の会議室または臨床講堂であった。

大陸における戦争は拡大しつつあったが、例会は休みなく続けられ、1943(昭和18)年2月26日第69回例会が、東京女医学会の名で催された最終の例会となった。

学会総会も1935(昭和10)年の第2回以後第6回(昭和14年)までは、年1回、秋期の日曜日午前8時より夕刻までの一日を費したが、第7回(昭和15年)からは土曜日13～17時と日曜日9～13時の土・日2日間を使って、1942(昭和17)年の第9回総会まで9年間、休みなく続けられた。

東京女医学会雑誌第1巻は昭和6年中に第3号までを出し、第2巻以後第12巻(昭和17年)までは年間3～4号を刊行している。創刊以来タテ書だった本誌は第7巻以後、ヨコ書となった。第13巻第1号(昭和18年2月)を最終号として、東京女医学会雑誌は誌名を変更されることになる。

昭和5年創設以来10有余年にして、東京女医学会は確実な成長発展を遂げた。東京女子医学専門学校校友と教授陣をもって構成される本学会は、会長 吉岡弥生校長の高邁な理想の下、広く医学各部門の進歩を目的とする総合医学会として、会員に自分達の学園の中で研究発表、学術討論の場を

提供した。

秋期総会の土・日曜日には、校内、校外、また全国各地から、会員多数母校に参集し、300席に余る第二臨床講堂を埋めつくした。発表演題を携えてくる者以外に、一目弥生校長の温顔に接し、その声を耳にせんため上京する卒業生も多く、学会の終わった2日目の日曜夜は、クラス会を催すクラスも少なくなかった。

学会主幹 吉岡博人教授は、幹事教授をはじめ校内多数各科教授方の支援・協力を得て、学会の運営に当って若き研究者を育成し、自らもすすんで、他の教授らとともに、総説、講義、その他の投稿をなした。古い巻を繙くと、数十年後に本校の教授となり、名誉教授となる本校出身の若き学徒の研究論文が多く見出される。

学校の図書室は第一臨床講堂に近い1号館の奥にあり、専任の職員を配して、図書の整備、管理は一切吉岡博人教授が当たっていた。そこで東京女医学会創設とともに、図書室は従来の図書関係の機能に併せて、学会事務一切をとりあつかう場処と化し、両機能共、博人教授の統轄するところとなった。その後図書館が博人教授を館長として独立した一戸建てとなり、後に新校舎に落着くまで、学会事務局はつねに図書館とともに移動する。東京女医学会を生み、育て、後に、今日の本学会に到らしめたのは、現在の吉岡理事長その人に他ならぬ。古い巻号の編集後記はことごとく吉岡博人主幹によって記されている。

Ⅱ「日本女子医学研究会」と「女子医学研究」(1943～1951)

1. 学会名と誌名の変更

太平洋戦争が苛烈となるに伴い、社会各方面の整備統合、物資の節約が強化されて、出版の統制が始まり、学術雑誌の統廃合が行なわれるようになった。主幹 吉岡博人教授は、医学会において独自の使命を帯びて結成された東京女医学会と同雑

誌の存続は、いかなる障碍、困難をも排して死守すべきと考え、当局と交渉の末、学会名を「日本女子医学研究会」と改め、雑誌名を「女子医学研究」と改題することによって、雑誌の継続が許されることとなった。戦時下統制政策の下、医薬学専門の学会誌がわずか38種に限られることになり、機関誌のほとんどすべてが無念の休刊を強いられた当時の日本で、学会名と雑誌名を改変しながらも、休刊を免れて存続し得たことを、吉岡博人主幹は、当時の編集後記で、同慶に堪えぬと述べている。

しかし一方、学会と雑誌の継続が認められたことは、同時に負うべき重大な責任をも伴うものであった。即ち、本誌は従来通り、単に会員の研究というだけでは掲載することができず、少なくとも何らかの意味で女子医学に寄与するものを掲載することになった。日本女子医学研究会会長を引継いだ吉岡弥生は、「女子を対象とする科学的調査研究が未だ体系的に整備されていないことに鑑み、新しく女子医学という医学の新分野からの要請にこたえて、本会会員が女子医学を使命と認識し、心魂を傾けつくしてその成長発展に尽力するよう」切望して、「女子医学研究」発刊の辞としている。以上の観点から、広く女子医学関係の権威者を参与あるいは評議員に委嘱し、本会の使命達成を図ることになった。

2. 戦時下の態勢

「日本女子医学研究会」第1回例会は、1943(昭和18)年4月23日に開かれ、同年10月23・24日には「日本女子医学研究会」第1回総会が催された。

例会は1944(昭和19)年につづいて、1945(昭和20)年にも、1月、3月、5月、6月と回を重ね、敗戦の8月を挟んで、早くも11月、12月と、年内に6回の例会を持っている。

1944(昭和19)年10月21・22日には「日本女子

医学研究会」第1回東京部会を開いたが、部会としてはこの1回に限られた。第2回総会は、敗戦の1945年の翌1946(昭和21)年、第3回総会が持たれるのは1947(昭和22)年10月であった。

雑誌「女子医学研究」の巻数は、「東京女医学会雑誌第13巻第1号のあとを継続して、第13巻第2号から始まることとなった。

昭和19年には日本出版会の指示にもとづき、論文集と抄録誌の2種が分けられることになった。専ら印刷紙の不足に対応したものであって、一般会員には抄録誌のみを送付し、論文集の必要な場合は、別に請求することとされた。

本誌存続の一方、至誠会員同窓会誌「女医界」(当時「母性と保健」と改称)は、40年の歴史を閉じ、本誌と合併されることとなった。「女医界」の誕生は女子医学、母性保健の興隆を期してのものであったことに思いを致し、「女医界」の発展的解消によって、バトンは「女子医学研究」にうけ継がれることになった。

「女医界」改め「母性と保健」を合併し、その機能をも兼ねることになったので、前記、論文集を甲類、抄録誌を乙類、更に加えて雑報を丙類として、一般至誠会員に丙類が送付されることになった。

改題以後の「女子医学研究」は、戦時下物資窮乏の中、主幹以下の努力で第13、第14巻(昭和18、19年)までは年内4号を刊行し得たが、敗戦の1945(昭和20)年の第15巻と、翌1946(昭和21)年の第16巻は1・2号合併号とした。1947(昭和22)年の第17巻1号と2号までは抄録誌と雑報であったが、第3号から抄録誌をやめ、原著を載せることとなった。

3. 戦後の復興へ

1946(昭和21)年以後も日本女子医学研究会例会は休みなく年数回つづけられて、1951(昭和26)年には第51回を数えた。

総会もとどこおりなく毎秋催されるが、1951(昭和26)年、東京女医学会時代の回数から通算して第17回総会とされた。

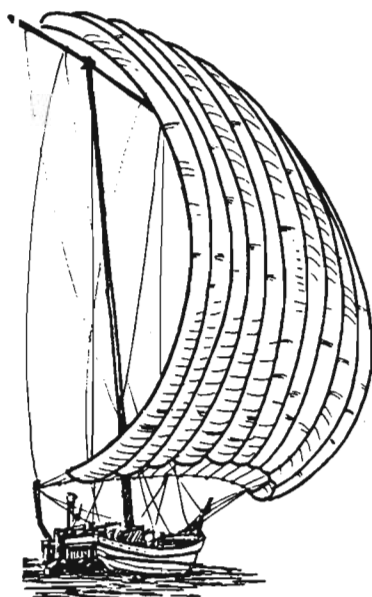
女子医学研究は第18巻(昭和23年)から第21巻(昭和26年)まで、年々3～4号を発刊して、戦後の復興期に入る。

東京女子医学専門学校から、旧制大学を経て、新制東京女子医科大学となったのは1952(昭和27)年であった。学長 久慈直太郎は1949(昭和24)年、学会長に就任した。主幹は依然吉岡博人教授が大学

図書館長職務の傍ら任じ、雑誌の復興にあたった。

新制医科大学として発足するにあたって、戦時中雑誌統合の重圧下選ばれた「日本女子医学研究会」と「女子医学研究」の学会名および雑誌名を棄て、本学会を「東京女子医科大学学会」、学会誌を「東京女子医科大学雑誌」とすることを宣したのは、昭和27年1月であった。

(228号につづく)



❀ 資料紹介 ❀

「東京女子医科大学雑誌」の半世紀 (2)

名誉教授 石井 妙子
前図書館長

Ⅲ「東京女子医科大学学会」と「東京女子医科大学雑誌」(1952～)

1. 第1期(1952～1964)

ポツダム宣言受諾による太平洋戦争の終結後は、国民生活の破綻、食糧危機、悪疫流行、インフレ等、様々の苦難を経て、対米講和発効して戦勝国による占領は終り、漸く我国が独立の日を迎えたのは、敗戦後7年の昭和27年であった。あたかもこの年に、東京女子医科大学は創立50周年の祝賀とともに、新制医科大学としての第一歩を踏出すことになった。その1952(昭和27)年、本学会は戦時中の学会名と学会誌名、「日本女子医学研究会」と「女子医学研究」を廃止して、改めて「東京女子医科大学学会」と「東京女子医科大学雑誌」を名乗って、「東京女医学会」および「東京女医学会雑誌」以来の学会活動を継続することになった。「吉岡荒太・弥生両先生以来待望の大学の名にふさわしく、名実共に充実した内容の学会誌にするよう。」と、吉岡博人主幹は同年、東京女子医科大学雑誌としての最初の発行にあたって、会員の奮起を促している。

✦ 学会例会

「東京女子医科大学学会」の名の下に催された最初の学会例会は、1952(昭和27)年1月25日の、前年につづく第52回例会であった。以後、年6回、ほぼ30年にわたって、例会は確実に回を重ねた。会場は、ずっと臨床講堂であったが、至誠会寄贈による本部講堂竣工以後、1960(昭和35)年5月の第101回例会から、大学玄関に入って、大学本部に向い合った本部講堂が使用されるようになった。

例会には従来のごとく一般演題に加えて、新任

教授・助教授等による総説演説がなされた。

更に、1962(昭和37)年1月、第110回例会より、臨床各科の指導による5・6学年学生の症例検討会を学会例会を期して開くことによって、医科大学の卒前および卒後教育の一環としての学会の機能を広げた。これは1982(昭和57)年、大学のカリキュラム改正までつづく。

戦後日本は、朝鮮戦争を契機に、鉱工業生産、都市化の進行とともに、やがてGNPの超高度成長期に突入するが、同時に、環境汚染、公害問題も激化する。衛生・環境関係の大多数の諸法規も改廃される一方、医療・医育の永年の矛盾が顕在化して、大学紛争の嵐は全国を席捲する。

本学は、心研、総研の設置とともに、広く学外からも研修医師を迎え、教育・研究・診療の三本の柱は一日も冒されることなく護られて、大学紛争の騒乱に捲き込まれることはなかった。

各科・各教室から、医学・医療進歩の最前線の研究報告が、ほぼ隔月に催される例会を賑わせた。

✦ 学会総会

吉岡弥生校長は1951(昭和26)年、公・教職追放を解除され、1952(昭和27)年、東京女子医科大学学頭に推された。日本女子医学研究会の回数を引継いで第18回を数えた東京女子医科大学学会総会は同年10月25・26の両日、晴れて会場に81歳の弥生学頭を迎えた。

榊原 仟 心研所長の心臓外科に関する報告をはじめ、特別講演2題、一般演題36題、第2日の昼食にあてた懇親会を含めて、出席者多数、晴々とした盛会の第18回総会であった。

3年後の第21回総会は、学会創立25周年記念を兼ねて1955(昭和30)年10月20・21の両日にわた

り、初めての公開講座をも含め、盛会であった。

第22回総会（昭和31年10月）において、本学会としてはじめてシンポジウム形式を採用し、教授・助教授10名のシンポジストによって「ホルモンの基礎と臨床」に関する討論が行なわれ、聴衆多数を集めた。シンポジウムはこの後、昭和34年を除き毎年の総会に行なわれるようになる。

年毎のシンポジウムのテーマは別表に示すとおりである。当時から現在に向けて、基礎・臨床・

予防医学の進歩・発達の流れを眼にすることができる。

至誠会寄贈の本部講堂において初の総会を開くことができたのは、1960（昭和35）年10月8・9日、第26回総会であった。以後、学会総会会場としては、のちに大講堂建設のため本部講堂が解体されることになる1984（昭和59）年までの25年間、専ら本部講堂が使用される。

第30回総会は1964（昭和39）年9月27日であっ

東京女子医科大学学会 総会シンポジウム
テーマと司会者（昭和31～60年）

昭和31年	ホルモンの基礎と臨床	小山良修 教授
昭和32年	悪性疾患	松村義寛・今井三喜 教授
昭和33年	高血圧	吉岡博人 教授
昭和34年	な し	
昭和35年	麻 酔	榊原 仟 教授
昭和36年	が ん	岩本彦之丞・川上 博 教授
昭和37年	リウマチの臨床	森崎直木 教授
昭和38年	糖尿病	三神美和 教授
昭和39年	感染症	織畑秀夫 教授
昭和40年	臨床検査法の進歩	松村義寛 教授
昭和41年	がんの臨床	三神美和 教授
昭和42年	出 血	榊原 仟 教授
昭和43年	各科領域における医原性疾患	三神美和 教授
昭和44年	リハビリテーション	森崎直木 教授
昭和45年	交通災害	織畑秀夫 教授
昭和46年	臓器移植	榊原 仟 教授
昭和47年	救急疾患の初期診療	三神美和 教授
昭和48年	各科におけるMEの進歩	岩本彦之丞 教授
昭和49年	抗生物質使用法の進歩	鎮目和夫 教授
昭和50年	二、三臓器癌の診断法の進歩	田崎瑛生 教授
昭和51年	脳卒中の診断と治療の進歩	織畑秀夫 教授
昭和52年	糖尿病学の進歩	平田幸正 教授
昭和53年	救急疾患の初期治療	織畑秀夫 教授
昭和54年	人工腎臓の発展と適応の拡大	太田和夫 教授
昭和55年	内分泌疾患の臨床	鎮目和夫 教授
昭和56年	画像診断の最近の進歩	織畑秀夫 教授
昭和57年	医学教育に何を望むか	菊地録二 教授
昭和58年	医療における死をめぐる	太田和夫 教授
昭和59年	癌治療の現況	小林誠一郎 教授
昭和60年	Aging と疾病	広沢弘七郎 教授

た。久慈直太郎会長は活気ある学会総会の状況を喜び、会後の独自の研究の継続・発展を祈念している。また吉岡博人幹事長は、第30回総会に臨んで、34年前の本学会創立当時、また戦時下の状況を回顧している。

✦ 吉岡研究奨励金

吉岡弥生学頭は昭和34年5月22日、88歳の天寿を全うした。この時、全国から献げられた香典を基金として吉岡研究奨励金制度が設けられた。

昭和37年以後毎年5月22日の弥生先生の命日を期して、本学会例会の席上、本学卒の優秀な研究者2名に奨励金を授与されることになった。第1回の本奨励金受賞者の研究発表は、昭和38年5月22日、第112回例会において行なわれた。

✦ 学会誌

「東京女子医科大学雑誌」は、「女子医学研究」を受けて、1952(昭和27)年、第22巻を以て始まった。

1952・53(昭和27・28)年の2年は4号ずつの季刊、1954(昭和29)年は隔月、6号までを出したが、1955(昭和30)年から月刊となって、以後年間12冊、もしくは、時に1・2号、または10・11号合冊の11冊発行を、今日までつづけている。

大学機関学術誌、医学総合誌として出発した本誌は、本学で研究・診療する男女医師の増加につけ、年を追うて医学各方面にわたる論文・報告の投稿が増した。はじめ年間200頁にも満たなかった本誌が、月刊となった1955(昭和30)年には600頁、紙質も上質となり、1959(昭和34)年には1,200頁を越え、たまたま旧制学位申請令の期限切れとなる1960(昭和35)年には3,000頁を越えた。その直後、昭和36・37年は600頁前後に減るが、昭和32年には本学に学位審査権が認可され、その後は再びふえて、年々ほぼ800頁から1,000頁余を保っている。

記事としては、総説、原著論文、臨床報告、症

例検討会記事、総会における特別講演、シンポジウム、例会抄録等、時に海外印象記や留学記等の投稿なども受入れ、1962(昭和37)年からは学位論文内容審査要旨を掲載している。

本誌の編集は、創刊当時は主幹 佐藤 清 教授につづく吉岡博人教授のほか2・3の教授によってなされた。「東京女子医科大学雑誌」となっただけからは、追々吉岡博人教授の他、三神美和、佐藤やい、佐藤イクヨ、島津フミヨ、中村敏郎、松村義寛、梅津隆子教授等を増員し、更に窪 敦子、菊地録二、山田喜久馬助教授等をも加えて、編集陣容を拡大した。その後は退任、新任交替しながら、教授・助教授7, 8人～10, 11人が編集に携わっている。これら幹事は、雑誌編集の他、集会の計画、準備、当日の運営等に当たった。庶務・会計は、最も古参の佐藤イクヨ教授が担当した。

本誌の編集兼発行者は、昭和8年以降、吉岡博人と登録されていたが、校務多忙のため1953(昭和38)年、佐藤イクヨ幹事に委譲することとなった。1955(昭和40)年、吉岡博人教授は学長・理事長に就任、同時に本学会会長となり、また図書館長の職をも退いて、佐藤イクヨ教授にゆずられた。学会運営の責任は、図書館長兼職の上で、一切佐藤イクヨ教授に任せられた。

学会事務室は、戦災後、校庭に建てられた独立図書館が心研建築のため解体されるに及んで、図書館とともに、本部地下室に仮移転し、中央校舎の工事竣工を待った。

2. 第2期(1965～1984)

会長として吉岡博人学長を頂き、佐藤イクヨ教授・図書館長を主幹として出発する1965(昭和40)年を、東京女子医大会第2期の始まりとしよう。

戦前から戦後の数十年にわたって本学会の運営、雑誌の編集に当って本学会を育ててこられた佐藤イクヨ幹事長は、1967(昭和42)年、定年により教授と図書館長を退職されるが、本学会に限って

は、退職後も名誉教授として幹事長の役を辞められず、1980(昭和55)年12月、84歳の高齢を理由に辞任されるまで、まさに十年一日のごとく、学会運営の陣頭に立たれた。

佐藤幹事長辞任後は、幹事の一人であり、図書館長を引き継いだ石井妙子(衛生学)教授が編集兼発行者として登録され、1984(昭和59)年、石井の定年退職まで、編集長をつとめた。吉岡学長就任後の20年間、佐藤・石井編集長時代をもって、東京女子医科大学の第2期とする。

1965(昭和40)年以降の20年間は、本学は中央校舎や北校舎が竣工し、消化器病、成人医学、リウマチ・痛風、糖尿病、腎、各センターの設立が相つぎ、中央病棟、東病棟の診療設備がととのって、大学本部も旧寄宿舎跡地に居を定める等の大発展を遂げる時期である。ここで教育・研究・診療に従事するものは、助手以上の1,000人を越え、内1/3が本学卒の女医、2/3は他の官公私学から卒後の勉学のために集まった男医である。医学の進歩、分科が甚しい結果、ややもすれば各自それぞれの専門にのめりこみがちの現代の医師達に、各科・各教室の業績を披露して、相互に専門知識を交換し、医学の総合性を涵養する広場を提供するのが、総合医学会の役目である。学会や学会誌で発表される研究題目はまことに多岐にわたり、その理解は容易ではないが、各専門誌以外に機関総合誌に投稿されることによって、学内の研究の動向が辿られる。

また学位審査権認可以後は、学位論文の掲載もふえて、大学における研究の歴史が、年々、ここに記録され、遺されつつある。

✦ 学会例会

例会は1965(昭和40)年1月の第129回から年々確実に6回ずつ催され、1984(昭和59)年11月の第260回に到っている。

例年、5月22日には吉岡研究奨励金の授与式が

行なわれ、その翌年の同月同日の例会において研究発表がなされた。

1975(昭和50)年11月28日には、例会第200回を記念して、永年学会運営に功績のあった佐藤イクヨ幹事長の表彰式が行なわれた。

松村義寛教授は1980(昭和55)年3月、定年退職と同時に学会幹事をも退任された。松村幹事には、永年、編集、とくに英文の添削等ではたいそうお世話をかけた。退職の前月、1980(昭和55)年2月22日、第230回例会において松村幹事に感謝状が贈られた。

✦ 学会総会

吉岡博人新学長を会長とする最初の総会は1965(昭和40)年9月26日の第31回総会であった。新会長は総会にあたって、「どの大学でも総合学会はうまくいっておらないが、専門のことは知るだけでなく、よその教室のことをいろいろ知るとは非常に大切なことと思う故、こういう学会が永くつづくことの意義は大きい。本学の卒業生が会場に入りきれないほど多数出席されて、自らの卒後教育とされることを希望する。」と述べている。

翌1966(昭和41)年の第32回総会は、本学創立65周年記念式典の行なわれた11月5日の翌11月6日に催された。本総会開会の挨拶において吉岡博人会長は、医学校への女性の入学を閉め出した、本学創立当時の日本の社会をかえりみて、「東京女医学校」を開校された29歳の弥生先生の昔を思い、本学会総会の今日を併せ祝し、多数の来会者とともに本学会の発展を祈っている。

第35回総会は1969(昭和44)年9月28日、第40回総会は1974(昭和49)年9月29日、第45回総会は1979(昭和54)年9月29日と、専門学会の多い10月に先んじて、毎年夏休み明けの9月第4土曜日に総会を開く習慣が定着した。

1984(昭和59)年9月29日の第50回総会では、

記念祝賀会において、学会功労者として、創設者・前会長の吉岡博人理事長はじめ、佐藤イクヨ、松村義寛、梅津隆子前幹事、石井妙子、織畑秀夫現幹事の6名が吉岡守正学会長から表彰状を授与された。本総会では、はじめて一般演題募集をとりやめ、教育講演等を盛った新機軸の総会として、至誠会東京都支部会員も多数参加して、賑々しく、華やいだ学会となった。年内に取壊しが予定されている本部講堂における最終の総会であった。

✦ 学会誌

編集幹事は教授・助教授10名が、折々退任と新任が交替しつつ、毎月1回の編集会議をつづけた。大学各教室の人員も、本学のみでなく他学からの各方面の人材を擁しているのです。基礎・臨床から有能幹事の参加を得、だんだん年齢も若返っていくことは、医学の進歩に伴って、甚だ好ましかった。

新校舎の建築が完成するまでは、編集会議を開く場所にも不自由し、講堂の片隅を借りたりしたこともあったが、昭和41年中には、仮住居の本部建物の地下室から、漸く明るい新校舎3階に、図書館に隣接した学会室を得て、末永く活動の拠点とするようになった。

1965(昭和40)年、第35巻以後、本誌の発行はとどこおりなく、年々800~1,500頁、11~12冊を続刊し、1984(昭和59)年、第54巻に到る。

総会記事については、第38巻(昭和43年)から、秋の総会の翌年の第1・2号、もしくは第2号をもって、総会号として特集することとした。この期間、新教授着任後10年、20年を経る教室も少なからず、当該教室の記念論文集を特集する機会もふえた。

定年を迎えて退職される教授も相つぎ、最終講義の投稿によって、記録に止めることに努めた。

学会誌掲載記事の詳細については、今回は述べていない。

学内では、各科・各教室の主宰で様々の学術集会、たとえば学会、研究会、講演会、シンポジウム等が開かれているが、大学全体としての情報はどこからも得られなかった。せめて判る範囲からでも、学内で行なわれる集会の情報を記録に残すことは重要と思われた。そこで、1983(昭和58)年から雑誌の号末に、「学術情報」欄を設け、得られただけの集会記録、その他これに類するものを掲載することにした。

また学内では、各科・各教室の肝入りで、海外から多くの招待講演者が招かれ、学内・学外からの聴衆を集めて、講演が行なわれている。これも、大学全体としての記録は、どこにも得られなかった。この記録も、日時と演題、できれば抄録だけでも、記録に残すよう努めることにした。

更に、海外からの招待講演者に記念として、本学の紋章と本学会名入りの、織畑秀夫幹事デザイン—青い小川の流に浮ぶ桜の花びらと緑の田んぼ—による七宝焼磁器製の盾形壁掛けを贈呈することを始めたのは昭和53年であった。以後の来演者には、この「記念の盾」が贈られているから、日本の東京女子医大の思い出としてよい記念となっていることと思う。

✦ 次の半世紀に向けて

1980(昭和55)年は本学会創立50周年にあたったが、半世紀をひと区切りとして、本学会も大きく飛躍したいものと、学会のあり方に関し、幹事一同協議を重ねた。

1981(昭和56)年7月25日付で、投稿規定を改訂し、投稿原稿の質の向上を期した。

1983(昭和58)年、吉岡博人会長は定年により学長を辞し、名誉学長・理事長専任となり、副学長の吉岡守正(微生物学)教授が学長に昇任された。本学会長は必然博人会長から守正会長に引き継がれ、東京女子医大会吉岡3代目の学会長を迎えることになった。

すでに1980(昭和55)年、当時副学長であった吉岡守正教授を、本学会は副会長として迎えており、以来副会長をも含めて、幹事一同、将来の学会のあり方について検討が続けられていた。

1983(昭和58)年、学会規則の一部を変更した。その結果、従来幹事の任期は4年とされていたが、再任を妨げないため、任期が延びがちであったのを反省し、任期を2年と改めた。

1984(昭和59)年3月、石井幹事長が定年退職するに及んで、編集兼発行者を吉岡守正学長と定め、編集長を十字猛夫幹事としたが、十字教授は間もなく他学に転じられたので、対馬敏夫幹事が替った。石井幹事は大学退職後もひきつづき、編集の席に加わるようになった。

1984(昭和59)年9月、新幹事が任命された。数年来の吉岡会長の意見にのっとり、学会の機能を集会と編集に分け、副会長・会計・庶務を含む集会幹事10名と編集幹事16名によって、仕事を分担することにした。学会のあり方については、新幹事によって、ひきつづき検討がつづけられた。

3. 第3期(1985～)

創設来55年、総会50回を送り、吉岡守正会長を頂いて、すでに第二の半世紀に突入し、新しい機構と人員構成を以て、独自の進歩と発展への努力を開始する1985(昭和60)年を以て、本学会の第3期の始まりとしよう。

1983(昭和58)年改訂の会則にもとづいて、当分は年4回の例会と1回の総会が持たれるであろう。

1985(昭和60)年、本誌第55巻第1号の冒頭に

は、新幹事の氏名と役柄が発表された。

1985(昭和60)年1月1日付で、寄稿細則に新たな改訂が加えられた。編集幹事はそれぞれの専門分野に応じて、投稿原稿の査読を分担し、月1回の編集会議に臨んでいる。集会幹事もまた月1回集会幹事会を開いて、学会の行事につき検討する。編集と集会の両機能を分掌することにした結果、幹事の負担を徒らに加重することなく、それぞれの仕事に集中できるようになって、甚だ能率的である。もとより両機能は密接な関係にあるから、両幹事会は、時に応じて合同幹事会を開くなど、連絡をとり合って、仕事をすすめている。

昭和60年5月22日の例会では、恒例吉岡研究奨励金授与式と、前年度受賞者の研究発表が行なわれたあと、弥生先生を記念する「吉岡弥生記念講演」の第1回として、作家澤地久枝氏の講演「いのちの重さ」が、第一臨床講堂の満席を埋めた聴衆に深い感銘を与えた。

第51回総会の昭和60年9月29日には、いよいよ旧本部跡地に大講堂建設のため、本部講堂はすでに解体されて姿を消していたので、昔にかえって、第一臨床講堂で総会開催ということになった。前年同様、一般演題の募集をやめて、特別講演、教育講演にしばったところ、至誠会員の出席も多く、甚だ盛会であった。大講堂が出来るまで、総会は昔懐しい臨床講堂にもどって、至誠会員を多数迎えて、教育講演をきくことになるであろう。

「東京女子医科大学学会」と「東京女子医科大学雑誌」の第3期に突入し、発行部数1,700を数える昭和60年末に到って、筆を擱く。

東京女子医科大学雑誌	
JOURNAL OF TOKYO WOMEN'S MEDICAL COLLEGE	
第 56 巻	昭和 61 年 1 月 25 日 発行 第 1 号
目 次	
(総 説)	
これからの小児科の役割……………山口眞智子…	1~ 7
(原 稿)	
7-Meiosis の細胞遺伝学的研究	
第 3 稿 全遺伝子 A-Meiosis の発現における免疫グロブリンの	
産生調節の役割……………渡田 克雄…	8~ 14
ラジエーションによる染色体異常の誘発……………野村 武雄・	
一基質的誘発と染色体異常の発現としての意義……………	
小野崎晴子・梶石 弘子・出村 聖子・出村 博…	15~ 20
ラッパ細胞下層からの CRP 分泌に及ぼす	
マブリンヘパタインの影響……………中神百合子…	21~ 27
腎臓癌における Tetrachromy の研究	
1. 腎臓癌物質の再検討……………橋本 隆子…	28~ 33
冠状動脈の免疫組織化学的研究 (第 1 稿)……………金田 良夫・平山 繁…	34~ 44
胎盤に於ける胎盤の解剖学的研究……………戸部 隆子…	45~ 64
東京歯科大学医科における内視鏡的胆膵造影に関する	
統計的観察 (1)……………菅本 利雄・阿部 和雄…	65~ 76
心臓-肺動脈の心身影響の観察と早期への応用……………藤 一博…	77~ 88
マウス胚盤孔による胎盤の観察に関する研究……………大橋 孝雄…	89~ 99
(学 会)	
東京女子医科大学平会 第 264 回例会……………	100~ 104
(学 費 徴 収)	
東京女子医科大学平会 第 264 回例会……………	105~ 106
(報 告)	
東京女子医科大学平会 第 264 回例会……………	109~ 113

東京女子医科大学
東京医大誌
J. Tokyo Women
Med. Coll.

東京女子医科大学学会
SOCIETY OF TOKYO WOMEN'S MEDICAL COLLEGE
東京都港区西船場 10 東京女子医科大学文芸館内

発 行 所 東京女子医科大学学会

編集兼発行者 吉岡守正

創 刊 年 1931 年

刊 行 頻 度 月 刊

会費(購読料) 年 6,000 円

